

為政第二

子曰、吾十有五而志干學、三十而立、四十而不惑、
五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。

子曰わく、吾十有五にして学ぶに志す。

三十にして立つ。

四十にして惑わず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳順う。

七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず。

(2-20)

< 吾十有五にして学に志す >

Q : 「子曰わく、吾十有五にして学に志す」とは何ですか。

A : (1) 「孔子が言った、私は十五歳で学問に志し」の意。

(2) 「私は十五歳ごろから先生、先賢の教えを説いた礼楽の学問をしようと決心した」の意。

(3) 「十有五」の「有」は「又」と同じ音義語「十且五」「十と五」の意。

(4) 「而」は接続詞で重みをつけた。

(5) 「志す」は「心の向かいゆく」「決心した」の意。

(6) 「学に志す」は三代の文化、先王の学を学ぼうと志を立てたの意。

< 三十にして立つ >

Q : 「三十にして立つ」とは何ですか。

A : (1) 「三十歳で、思想も、見識も確立した」の意。

(2) 「三十歳にして、その礼楽の学問について独自の見識が確立した」。

(3) 「十五歳で志した先賢の礼楽の学で、独自の思想・見識をしっかりと確立した」。

(4) 「その学で一家を成した」

< 四十にして惑わず >

Q : 「四十にして惑わず」とは何ですか。

A : (1) 「四十歳で心の惑いもなくなり」の意。

(2) 「四十歳ごろで事理が明らかになって、物事に惑うことがなくなった」。

(3) 「事に当たって惑うことがなくなった。理性的に、意志的に物事の道理に惑わなくなった」。

(4) 人格と見識が確立され、「三十にして立つ」の知識獲得の一段階より更に大きく飛躍した

もの。

(5)三十にして学理探究に一時期を画した孔子は、更に十年間の深い知識修得の努力と激変する社会情勢を静視することで、己の去就に惑うことが無くなったのが四十歳ごろ。

<五十にして天命を知る>

Q:「五十にして天命を知る」とは何ですか。

A:(1)「五十歳で天から与えられた使命を自覚した」の意。

(2)「天が自分に命じ与えたものが何であるかを覚り、また、世の中には天運の存するということを知ることができた」。

(3)孔子は50歳のころ天命を受けたとの信念に達した。

(4)「人間の力の限界を知った」の意か。

<天命>とは.....

1.孔子の思想から考えて、次の3つの意味がある。

(1)天がこの人間に与えた人の本性の働きというものは何か。

(2)自分のこの世に生まれた使命。

(3)天の支配に在る窮達、その運命というようなもの。

2.この3つの意義をもつ「天命」を知った孔子は、人の本性の働きとして「仁」という徳の名を説き出した。自分のこの世に生まれた「使命」として、先王の礼楽の教えで天下を平和にしようと考えた。

3.その3つの運命という意味は「人知らずして慍らず」と同じで、他人が自分の能力を認めず、登用されないということは、天運で如何ともできないものだから、その命に安んずるという、大悟徹底した境地にいたる心境。

(5)「天命を知る」とは、聖賢の世界が開けたの意か。釈迦は35歳にして大悟したというが、同じような意味か。「天命を知る」とは、天が人間に与えた性の働きは何かということを知り、自分がこの世に生を与えられた意義、すなわちこの世に生まれた使命を知り、また、人力では如何ともできない窮通の分を知ること、大自然の命理を悟った。

(6)易に「理を窮め、性を尽くし、以て命に至る」(説卦伝)とあるが、「天命を知る」とはこの意味。これらの心境は、論語に^{しばしば}屢々出てくる。この時期を画して、孔子の人生は大きく展開、天理への開眼、真理と人間の問題に一解決を得た一個の哲人となった。

<六十にして耳順う>

Q:「六十にして耳順う」とは何ですか。

A:(1)「六十歳で何を聞いても耳にさからうことがなくなり」の意。

(2)「六十歳ごろは、何を聞いても皆スラスラわかるようになったし、世間の毀譽褒貶^{きよほうへん}にも心

が動かなくなった。

- (3)六十歳になって知識広博となり、毀誉に超然たる円熟の境地に達した。知と徳の円熟さの極点を得た。
- (4)孔子は博学であったようだが、ただの物知りではない。事理の解明に滞ることがなかった。世の毀誉の言を超越した。自分の使命に生きる孔子は、世人の悪評や褒め言葉に心の動くことはない。自分の耳に入る言葉は悉く消化されて、何の障害をもおこさない。
- (5)「五十にして耳順う」とは、悟達と理解の最高峰。超越境に自適したもの。

<七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず>

Q:「七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず」とは何ですか。

- A: (1)「七十歳になると、自分の欲望のままに振る舞ってもその行動が道徳からはずれることはなかった」の意。
- (2)「七十歳になっては、心の欲するままに行うことが、いつでも道徳の基準に合って、道理に違ふことがなくなって、真の自由を楽しめるようになった。
 - (3)七十歳になって心の欲するままに行動しても、規範に合し、道理にはずれるようなことがなくなった。自由に自然に振る舞うところ、そのまま道に適中するという徳の極致に達した。
 - (4)「六十耳順」が超越境なら、「七十従心」は解脱境と言える。
 - (5)七十にして心の欲する所に従えどもすべての規範・法則を踰えないとは、超越境から再び行為の世界へ戻って、しかも何等の障害のない解脱の世界に入ったと言える。現実の意欲と理性の合致、調和。人の内なる道德律が、天なる真理と常に合することのできる人間的行動。真の自由の世界。人生究極の解脱境。孔子は学問と修養によりこの偉大な境地に到達。東洋における人世の師父とはまこと孔子を言う。
 - (6)ちなみに、この孔子の言葉から、人の年齢を十五を「^{しがく}志学」、三十を「^{じりつ}而立」、四十を「^{ふわく}不惑」、五十を「^{ちてんめい}知天命」、六十を「^{じじゆん}耳順」、七十を「^{じゆうしん}従心」の年と言うようになった。

2011年6月6日林明夫記